

# 増田友也の退官講義から聴こえる言葉 ——「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」に寄せて

黒田 智子 武庫川女子大学 生活環境学科

## 1. 退官講義の内容と意図

増田友也は、その退官講義「建築以前」(1978)において、建築とは何かという建築論にとって本質的な問いに対する自らの思索について語った。その過程において、森田慶一が「原理(*archē*)を知る工匠の技術」と翻訳した *architeconicē technē* の意味を、*technē*、*architectōn*、*architeconicē technē*、*archē* などについて吟味することを通じて再考した。その結果、講義が終盤に差し掛かる頃、次のように述べている。

「本源や原理を見分ける術、それが *architectōn* であり、*architeconicē technē* であるとするならば、そこにはそれが建物を造る理由がなく、当然のことですね」(増田友也、「建築以前」(退官講演)増田友也著作集 V、p.301)

この言葉が、「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」の著者の内にわかせた当惑感は、以下のように記述されている。京都大学における建築論の継承においても、建築論そのものの存在意義にとっても、根本に関わる視点からの問題提起である。

「建築とは何かという問いから始まった探求は、「*architeconicē technē* に建物を造る理由がなく、当然」という予想外の結末に行き着く。われわれはこれを一体どのように受けとめればよいのだろうか。増田のこの結論に大きな「当惑感」を覚えずにはいられない。森田が探求した造形原理としてのアルケーは *architeconicē technē* からすっかり雲散霧消している。はたしてそこに建築論は残っているのだろうか。」(田路貴浩、「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」、建築論研究、p.18)

京都大学建築学科において初めて建築論を学問的に構築しようとしたのは

森田慶一であり、その発展的継承が増田友也の役割であることは、誰よりも増田自身が認めていたと思う。そして、architeconicē technēの森田による翻訳「原理を知る工匠の技術」は、解釈であり定義でもあるため、建築論研究において現在もなお重要な用語であろう。したがって architeconicē technē からの「造形原理の雲散霧消」は確かに当惑して余りある。造形原理が、建物を建築作品にするならば、その「雲散霧消」は、建築論の存在意義に直結する。確かに前述の増田の言説は、一見、森田が構築した建築論を解体しようと意図したかのように見える。

では、増田の真意は本当にそこにあったのだろうか。筆者には、その真意が、森田の建築論をもとに建築の造形原理をより深く問い直し、archi-technēという造語によって自ら名付けた概念によって、新たな地平を開くことが目的だったのではないかと思う。本稿では、そのことについてまとめてみたい。

森田とは幾分違うバランスだったかもしれないが、研究と設計を両立させた増田であれば、建築学科の教授として最終講義において語りうることは多かったと思う。しかしながら、自身の成果ではなく、その1か月前に出版された他ならぬ森田慶一の『建築論』における「西洋建築思潮史」の書き出しの一部分(前掲書V、p.269)を対象に最終講義をおこなった事実には、すでに増田の真意が読み取れるように思う。退官講義とは、大学人としての最終講義である。最終である以上、大学人としての後進への「遺言」である。増田自身、その意味で、京都大学で教鞭をとり、建築とはなにか、建築するとはどういうことか、について語った自らの言説の中で、最も重要であると考えていたのではないだろうか。それからあまり時を置かず亡くなられたことを考え合わせると、一層その感が強くなる。

## 2. 増田友也が後進に託したこと

筆者は、哲学には不案内であるし、増田友也による建築の理念・方法や作品についてもよく知らない。そうであるにもかかわらず、「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」に助けられて増田の退官講義を読んでみると、増田の声なき声が聴こえてくるように思う。そこで、本稿ではその声を書き留めるという形式で「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」に対する感想を述べたい。退官講義に出席した後進には、増田のそば近くで研鑽を共にした高弟もいれば、入学して間もない初学者もいたであろう。多様な、未来ある聴衆に向けた講義であるなら、時を超えての筆者の感想に対しても、増田自身は寛容ではないかと思うからである。

## 2.1 底なしの始源 archē の探求

私は、森田慶一先生の「architectōnであり、architeconicē technē」を土台として、archi-technēを見出し、その内容について語りました。森田先生の探求がなければ、それは不可能だったことは言うまでもありません。森田先生は、その大学人としての人生をかけて『建築論』を上梓されました。私もまた、そのようでありたいと思って退官講演をおこないました。

建物をつくる理由は、archi-technēにあり、それが無ければ、棟梁の術はたちどころにその意味を失ってしまうのです。archi-technēの追求を、今日、ここで、私は、未来を担う皆さん方に託します。archēを知るとは、自らの生きる根拠を知ることです。それは、自らの存在の根拠であり、それゆえ、自ら存在したいと願う世界の姿をも示すのです。

そのことについて、もう少しお話ししましょう。生きる根拠を知るとは、到達不可能な底なしの始源 archēを探り当てて、それを自らの原点とし、しかもそこから立ち上がる、それを繰り返しながら生きることです。建物ではなく建築(作品)をつくらうとするなら、それは、絶対に欠かすことができません。

では、底なしの始源 archēとは何か。もしも、造物主の世界創造に続くことが建築家の役割であるならば、それ以前に存在した混沌と同質のものを想像してもよいのです。しかしながら、私は、archēとは自己の「ある」ことだと考えています。一つには、世界がどうあろうとも、人にとっては自己の感得する世界が、まずその人の世界であるからです。しかしながら、人が自らの世界をそれに限定するなら、それは、文字通り個人的な世界にすぎません。一方、建築家が建物ではなく、作品をつくらうとするなら、建築家が感得する世界は、普遍性に関いていなければなりません。

以前私は、自己の「ある」ことを以下のように述べました。それは今も変わりません。

「厳然たる何者かのような自己はあり得ない。したがってそのような自己主義も——ありうるとすれば それは我執にすぎぬ。我執のような執着の仕方では、それはある。生きることの悩みも 死の苦しみも そのようなあり方で ある。」(増田、法華クラブ(京都)の建立に際して、V, p.149)

若い時には、さまざまな夢を持ち、夢に向かって生きるでしょう。将来ある皆さんに、心から幸多かれと祈ります。しかしながら、必ず生きる苦しみ、病む苦しみ、いつかは老いる苦しみ、そして必ず誰にも死の苦しみが訪れます。富、権力、名声を欲しいままにしてもそれは人とともにある。言葉を替えるなら、底なしの始原 archēとはそのようにして人類の誕生とともにあるのです。

否応なく訪れる苦しみであれば、一時的にでも逃れたいし、苦しみから立ち上がるどころか、それと直接向き合うことさえも、並大抵ではありません。

もちろん、世間的な願いや欲望に正直であることを私は決して否定しません。しかしながら、建築作品をつくることは、世間的な願いや欲望を満たしつつあるそのただ中であってさえ、底なしの始原 archē と向かい合うことなのです。なぜならば、建築作品をつくるということは、不可避免的に個人的な作品にとどまらないからです。一人でも多くの他者のために、善き普遍性に向かって開いていなければならないからです。そもそも、普遍性に善悪の判断が働くとなるとそれはもはや普遍性ではなくなり矛盾しているが、善き普遍性に関くとは、自らの個人的な願いや欲望がどうであれ、他者の幸せのために建築家として善き世界の創造に参画することだととらえたいのです。

その実践は、他者の喜びはもちろんですが、普遍的な苦しみを直視し、共に分かち合うことを前提とします。その時、それらに、自己の喜びであり苦しみとして向き合うこととなります。私は、設計が好きです。しかしながら、なぜこんなに苦しむのかと思う。その根本的理由は、そこにあると考えています。そうであるからこそ、乗り越えていく喜びは、経験したものには分からないと思っています。

## 2.2 底なしの始原 archē から立ち上がる

建築家の喜びとは、他者の喜びや苦しみを直視し、善きものに導く契機を作品に込めることでなければなりません。誰が好き好んでそれを実践できるでしょうか。まして、それを善き方向に導くという場合、一人でも多くの他者といいましたが、おそらく個々の価値観や願いを持った人々に対して、一体どのように「善き方向」を定めることができるのでしょうか。ただでさえ、建築には、法的、経済的、力学的制約があるのです。それは、建築家にとって、まさに底なしの始原 archē といえる状況ではないでしょうか。

このほとんど不可能と思われることを、普遍的な方法で可能にしようとした人々が存在します。例えば、キリストや仏陀をあげることができるでしょう。彼らは、自らの苦しみを乗り越え、他者の苦しみを癒し、普遍的な喜びへと導きました。建築家ではないことに注意してください。

彼らは、自らの行いと言葉によって、他者の心を変え、それによって生き方も変えました。多くの宗教家が、それに続きました。建築家として建築作品の創造を探求してきた私は、直接に彼らの歩んだ道を辿ったわけではありません。しかしながら、建築作品とは、善き世界へ向かう契機であり続ける建物だと気づくと、彼らの力を求めずには、先に進めない日がどうしてもやってくると思います。

したがって、私は、たった一人で、その時々において、底なしの始原 archē か

ら立ち上がってきたわけではありません。森田先生、ギリシャの哲学者、ハイデッガー、道元とともに、それを実践してきたのです。言い方を変えるなら、森田先生の建築論、ギリシャ哲学、存在論、正法眼蔵という土台の上に自らの建築論を積み上げてきたのです。その結果として、「建築論」になくてはならない、他を持って替えることのできない核心を archi-technē と名付けて、今日、皆さんに示したのです。

建築とは、底なしの始源 archē つまり、避けられない苦しみや迷いの上に存在するのです。そこから立ち上がることが、建築することです。その方法を知ることが、archi-technē です。それを今日は、論証という形式で試みましたが、それは、建築設計という実践において、私自身が実感したことでもあるからです。彼らは私の孤独な実践の導き手であり、信頼する師として、いつも共にありました。というか、私は、自らの孤独に負けまいと思う気持ちから、彼らの手を放すまいとした、といった方が正直かもしれません。

最初は、日本人としての文化だけでなく現代文明のすべてを投げ捨てて、人類の原初的建築存在をみようとして Arunta 族、Todas 族の居住空間について考えました。そこにはすでに、個を超えて共有するという意味で普遍性に向かっている「聖」の表現がありました。

また、現代文明においては、ハイデッガーの哲学が私を導きました。現代の建築は、ハイデッガーを援用すれば、「大地」、「天」、「神的なるものたち」、「死すべきものたち」(坂戸省三氏の記憶によれば、増田友也は、複数形ではないがこの訳語を採用していたとのことである。2019.12.11ヒアリング)の四者の世界が集まり、互いに出会う場を開くと考えます。それをどのようにつくるか、に先立って、建築が開く場に「神的なるものたち」を入れたことを、決して忘れないでください。

ハイデッガーは、無神論者とされますが、カソリックの家に生まれ、キリスト教神学を深く追求した経験を持ちます。つまり、人の苦しみとしての「到達不可能な始源」を探り当て、そこから立ち上がり、最後は天に昇り人々に救済の聖なる世界を示した、そのようにこの世に存在したキリストについて、ハイデッガー自身の知り方で、可能な限り深く知っていたと思います。つまり、キリストが歩んだ道に沿って自らの生きる根拠を求め、存在の根拠を求め、キリスト教の神と出会ったのです。やがて、キリスト教から離れましたが、その時の神の感得は、「神的なるものたち」として残った。そうして、さらに生きる根拠、存在の根拠を求め、遡ってギリシャの哲学者の歩んだ道を通り、多神教の神々と出会いました。

決して道なき道ではありません。ハイデッガー自身が、一人ではなく、先人が切り開いた道を、困難ではあっても覚悟を決めて自分なりに辿ったのです。それは同時に、哲学者として生きること、「哲学すること」でした。躓きもあったと思いますが、そのように生き切ったのです。

私もまた、建築論を探究する大学人であり建築家として、先人たちと共に生きることが、「建築する」ことであつたと思います。私の生き方を道標に、皆さんは、皆さん自身の始原を探索し、そこから立ち上がつて、そのことを常に問い続けながら、それが「建築する」ことであるように生きてください。その道標になれば幸いです。

### 3. 森田の時代、増田の時代、そして現在

増田友也の退官講義は昭和53(1978)年に行われた。今から、42年前である。そこには、今と違った時代状況があつた。その後のベルリンの壁やソヴィエト連邦の崩壊などは、想像もされない冷戦時代だつた。大学紛争が沈静化し、オイルショックを経て日本経済は下降していた。増田の退官講義は、そういった中で行われた。

現在がどんな時代か、それに対する建築論の意義や役割とは何か——『建築論研究 vol.1』の「創刊にあたって」には、そのような問題意識が示されている。特集「建築論とは何か」に対する感想を求められて「森田慶一の建築論に対する増田友也の当惑感」を選択したのは、その中で著者が森田と増田との間にある「当惑感」に言及し、そこに自らの「当惑感」を重ねているからかもしれない。建築とは何か、という建築論の根本的な問いに対して、それぞれが生きる時代に解に求める際の、前提条件のずれのようなものが身近に感じられた。

森田慶一も、増田友也も、ともに戦前と戦中を体験し、戦後を迎えた。森田は、1920年に東京帝国大学建築学科の同級生と分離派建築会を結成、大正デモクラシーのただ中で建築表現を探究する日々があつた。一方、増田が京都帝国大学に在学した1935年から1939年は、まさに戦時下にあつた。その違いは、例えば、戦後、戦争責任についていわゆる知識層にも社会の関心が集まる際、平たく言えば「善き普遍性」に対しての解釈や思考の違いをもたらさないではおかなかつたのではないだろうか。退官講義には、増田のそんな思いをも潜ませているように思う。

増田は、建築する苦しみに先立って、戦争がもたらす苦しみを自身の青春時代に受けていた。その経験は、増田に対して、建築とは何かという問いを発すると、瞬時に立ち頭れる人間とは何かという問いの質を条件づけたのではないかと思う。その条件に応えるのは重く苦しいことではあつたが、善き世界を築くには、必ず伝えるべき問いであると考えていたのではないかと思う。そうであるならば、増田の姿勢は、新型コロナ感染拡大による世界難の現在においても、建築論探究の道筋を示し続けているのではないだろうか。